

御家様との初対面

松井 夕ヶヨ

昔空飛ぶ鳥をも射落すと云われた神戸鈴木の会社勤務の明石松井家の長男の嫁として大正九年十一月九日、私は結婚し一週間程して夫元の姉「夫棟野武吉で重役秘書後に日輪ゴム工業株式会社社長」に付き添われて須磨鈴木本家に挨拶に伺った時の様子を申しましよう。

御手入れの届かれた植木の表玄関に案内を請うと、執事（加藤重俊氏）の方が奥座敷の大広間に通して下さいました。姉は流行の束髪に黒の三ツ紋羽織、お召着に花模様塩瀬の丸帯に畳表の桐の履物で、私は濃海茶の縮緬の重着で、胸の紋の両方に紅葉と菊のある縮模丸帯に、赤い鹿子手柄かけ銀糸で松の縫取りのある丸帯、ピロードの空気草履でございました。

待つこと少々で御家様の御入来、御初の御姿はこの時で、上座の床柱の前の右に西陣織の脇息を紫縮緬の厚い座蒲団二板の高い上にお座りになりました。姉が参上の由を申し上げますと私は学校で習った作法流で指を揃え頭を畳に付ける様にしておりました。

目上げると、御色白な福々しい丸顔で黒い御髪は中程に束め巻で、お召着物に羽織のお姿でいらっしゃいました。御言葉は柔らかな姫路訛りで「お里は？」姉が「姫路」と答え、又御家様は「何町？」姉は「坊主町ですの」御家様は「あたしは船場（米田町）の方でな、あ、そう、野里に紅屋と言いうちがあるやろうな、親類でよう坊主町のお城のそばの堀端を通ったもんやが……」と申されました。

紅屋は家号で私の学んだ野里校から見える倉の有る格子作りの旧家で、金持さんで今の銀行の様な仕事を明治前までなされた様聞いて居りました。門前には御庭から清水がお堀に流されておりました。

分かれているに面し堂々たる威容を誇る、ハンブルグ・アメリカン・ラインの本社があった。差詰め曾って、マッカーサーが第二次大戦終了後、進駐の本拠にして居った、第一相互のビル、あの皇居のお壕を前に聳え立っているあの建物と、髣髴の構えであった。後に横浜正金銀行がその一室を借受けてオフィスを開設したが、その豪壮な建物の玄関の段に、麗々しき大文字の横書がある。「Mein Feld ist die Welt」。「我が戦場は世界なり」。当時カイザーは世界制覇を目ざし、日本で言えば往時の日本郵船のような自国の世界に誇る大海運会社ハンブルグ・アメリカン・ラインを駆使して世界の通商の制覇を遂げんとした、その気魄の面目躍如たるものがあるを見て、筆者は強烈な印象を受け独乙魂の気魄に圧倒された次第であった。

そのカイザーの雄図も空しく破れ、過酷極まる賠償の負担に喘ぎながらも、星移り月変わりやがて不世出の怪物ヒットラーの出現により再び抬頭、独乙は又もや世界制覇を目ざし縦横無尽に暴れ廻った揚句の果てに第二次世界大戦敗戦の断末魔を迎え、そのハンブルグも米軍のジュータン爆撃の洗礼を受け敗れ去ったのであるが、筆者は、往時感激の的であった、あのハンブルグ・アメリカン・ラインの本社建物の運命が気がかりでならず、戦後同市を廻って来た人々からその消息を聞いて見たが、誰も知らないとの事であった。

処が茲に、後日譚がある。たまたま先年日商（岩井と合併前）の宮口俊二郎先輩が独乙総支配人としてハンブルグに駐在して居られた際、同社にまつわる筆者の感激と印象を申し上げ調査をお願いしたところ、右建物は旧態依然として現存のこと態々スナップ写真を撮られて恵贈に与かり、約半世紀前その儘の雄大なる独乙文字に接し感慨深いものがありました。爾來星霜半世紀、今や日本の大商社群は、それこそ、エコノミック・アニマルと憎まれ口を叩かれながら、往年のハンブルグ・アメリカン・ラインそのけの世界通商制覇戦に活躍している現状を見て、うたた感慨無量のものがある次第である。

た。私の弟が幼い時鯛焼をその水に「そらオトト（魚の事）にがしてやるう」とぼんとなげたことを思い出して急に里恋しく目頭が熱くなったのも覚えて御家様の御声が優しく嬉しくなつかしくなりませんでした。

その翌年の春本家で園遊会があり、姉と私も出席致し御家様御一家御揃いで御出ましの時孫姫様の千代子さんに少しはなれた場所でお目にかかりました。お静かそうなお美しい御嬢様で、お癖の無い髪を小さく束髪に少し毛が赤く見えたのがとてもハイカラさんで同じ年の私は羨ましく存じました。大変画が御上手で掠野で頂いてたのを拝見したこともありませう。

次に姉と話合っていた海外支店より帰えられし夫人の美しくしさに見とれたりしてお庭に出ると、大柱のつなに空高く万国旗が張りめぐらされて良き場所売店が作られ、オシルコ、おだんこの甘かったこと、明石の鱈など色々串にさしたおでん、果物も頂き、面白い余興あり、最後が福引で番号合せて戴きに御家様の前に礼を出しました。姉は南洋の土人の作った籠で、私は綿の木綿布団地一反で、その他お土産を持って帰りました時、母上は喜んで下さり、早速と或る日父上の敷布団を作り上げました。

楽しかった此の日の話しに花を咲かせ松井家では和やかな日を過ごしました。お店ではその後着物を揃えに袖を一反づつ染めて御心づかい下され、御家様の横桔梗の紋一つ入りのネズテツ色でございましたが、私は東京支店に転任され、長男の哲が生まれましたので、その着物は父上の羽織に縫って上げて散歩や床屋等に折目正しいのを九十才で世を去るまで着せていただきました。御店の事は松井家では言葉丁重に申し、一にも二にもお店で朝食は揃って頂くが、元は昼も夜も夕食もお店出るので日曜も出勤で、昼食後帰宅を許されていたので新婚夫婦の散歩など夢にもなしの生活で、金子様の命によく仕え、子供が出来てからも、ほとんど食事を揃ってとったことはありません、子供と家を守り楽しく、つましく暮らしてまいり三人の子供も立派に社会人になった今の幸を胸いっぱい味

わわせていただき感謝致しております。子達は父が世を後にした時父上は偉かったと涙しました。これ皆鈴木のお店のお守りと有難いことと思っております。床の上に飾ったお家様と金子様の御写真は戦火で灰になったことが惜しくなりません。

私の兄がドイツへ留学の年に船で上海に一泊し、暇潰しにその時の活動写真なるものを見物しておりましたらニュースで「大日本神戸鈴木の会社倒産す、女社長鈴木よね」として大きく御家様のお顔が写つされたので兄は驚ろき、すぐ上海支店を御見舞に行きましたら引揚げ中で大騒動だったそうでございます。色々の事がありました。年月の立つうちに又昔の様に皆々様の御努力で名こそあれども立派に会社も続けられて尚々御栄えゆく今日をお祈り致し祝福申し上げます。

昭和四十七年九月十一日

（鈴木商店東京支店 松井 元氏 未亡人）

外国電信部にいたころ

廣岡 一男

私が本店の外国電信部に勤務したのは、大正九年春から僅か一年半ばかりの短い期間ではあったが、今ふり返ってみると、私にとっ

て一番楽しい思い出の時期であった。まず第一に、主任（部長とはいわなかったように思う）の木村さんと童さんの外は、皆大体二十二、三位の若い連中ばかりである。学校を出たばかりで、まだ書生気分の抜けない者も少なくなかった（私なんかその一人であった）。だから直ぐ親しくなり、お互に「俺」「お前」と呼び合う間柄の者もできた程で、職場の同僚というよりも友達同志という方がふさわしかった。

そんな雰囲気なので、私には何だか学生生活の延長のようにも思われ、明朗で楽しい毎日であった。昼さかりには皆で時々アマミダも